

ヴィクトル・ユゴーの宗教的感情の源泉

杉 山 正 樹

(Masaki Sugiyama)

ヴィクトル・ユゴーは一八四九年にカトリック教と完全に袂を別ち⁽¹⁾、その後その特異な宗教思想から独自の宗教をうちたてようとしていた。この間のかれの宗教思想を調べてゆくうちに、はたしてヴィクトル・ユゴーが敬虔なカトリック信者であったことがあるだろうか？ という疑問が提出されたのである。

かれはシャトーブリアンの影響で母から受け継いだヴォルテル派の尊王主義を捨てキリスト教徒の尊王主義に改宗したといわれている⁽²⁾。しかし、この改宗は事実であろうか？ もし事実とすれば、かれを改宗させたのは実際にシャトーブリアンの影響のみがその原因なのであろうか？ そうとすれば、それはシャトーブリアンの文学か？ 宗教か？ 政治か？ これらの果しない疑問をユゴー自身に向けて、そこから答えを得ようとしても無駄である。というのはユゴー自身が自分の青春時代を単に語り、時には判決を下し、しばしば正当化しようと試みたテキストはありあまるほどにある。しかし、その思想遍歴のために生涯かれに向け続けられた非難にたいして、あまりにも性急にその正当性を証明しようとしたために、そこでは全く別の根元から出ている二つのもの、つまり表面的なイデオロギーの変化と、そのイデオロギー革命のなかでの精神的統一性とが同じ次元で取り扱われているために、そ

れ自体論理的に矛盾した弁明しかされてい⁽³⁾ないからである。それゆえ最初の改宗にたいするヴィクトル・ユゴーの答えは時には肯定であり、時には否定である。そればかりでなく、これにたいする史家・評家の意見も肯定、否定、中間説の三者三様の意見がほとんど同じ割合でい⁽⁴⁾りみだれてい⁽⁵⁾るありさまである。

さらに、青少年時代のヴォルテル派の尊王主義とはいかなるものであるか？ 王政復古期の一般的な通念に従えば、尊王主義は自動的に信心深いカトリック擁護派に結びつき、ボナパルチスムや自由主義は無宗教の反教権派に連なるものであ⁽⁶⁾った。このような時代に、反宗教的な臭いのするヴォルテル派と尊王主義との変則的な結合がはたして可能であつたらうか？ もし可能であつたとすれば、どのような意味あいのものであつたか？ このヴォルテル派の尊王主義の源泉が、ヴィクトル・ユゴーのいうように母にあつたとすれば、母のそのような思想は誰の、また何の影響で形成されたのか？

このようにヴィクトル・ユゴーの宗教的感情の源泉を探索するには、どうしてもヴィクトル・ユゴーの母にまで溯らねばならないのである。

第一部 母ソフィー・ユゴー

一、母の影響

ヴィクトル・マリ・ユゴーが軍務でエルベに駐屯していた父の許を離れ、母に連れられてパリに移り住んだのは

満二歳足らずの時であつた。⁽⁷⁾それ以来、両親が別居生活を続けたため一八〇三年から一八二三年まで、つまり満二歳足らずの時から二十一歳までの約二十年間をヴィクトルは殆んど父に会うことなく母の傍で過したのである。それゆえ、ヴィクトル・ユゴーは母のみに育てられたといつても過言ではない。

ソフィー・ユゴーは独立心が強く、いかなる困難にも動じない強い気性の持主で、夫に対しては悪妻であつたが、子供達に対しては献身的な立派な母親であつた。⁽⁸⁾かの女が父親の庇護のない三人の男の子に注いだ愛情は並大抵のものではなく、すべての望みを子供たちに向け、息子たちの才能を信じ、それをのばすことに一生を捧げたのである。これに答えた子供達の愛情も並はずれたものであつた。母の死後、ヴィクトルは許嫁のアデル・フーシェに次のように書き送っている。

神様だけがご存じのことですが、ぼくのお母さんほど愛された母親はこの世に一人もいないはずですよ。それほどぼくはあの気高いお母さんを愛していたのです。⁽⁹⁾

「気高い」という形容詞はヴィクトルが母を語る時に必ず用いたもので、この言葉が示すように、ソフィーは気品のある、またそれだけに厳しい母親でもあつた。母の命令は、たとえどんなに厳しいものであつても絶対であり反抗は許されなかつた。アデル・フーシェとの結婚を禁止する無情な母の命令にさえヴィクトルは黙々と従つたのである。⁽¹⁰⁾しかし、この厳しさによって、ヴィクトルの愛情は尊敬に、そして一種の信仰ともいえる状態にまで高められ、この信仰はどんな時にも変ることがなかつた。「ヴィクトル・ユゴーを語る」の一節は子供たちの気持を次のように描き出している。

かれ(ヴィクトル・ユゴー)は母親だけを見つめていた。かれはせいぜい一年に一度か二度バリーに来て、しか
ヴィクトル・ユゴーの宗教的感情の源泉(杉山)

も一日か二日しか滞在しない父親を以前にもまして無視するようになった。……子供たちが母親の肩をもったのは当然のことであった。かれらが母親から離れたことは一度もなかったのである。かの女は何事につけてもかれらに不自由な思いをさせず、のびのびと育て、かれらの将来を子供たち自身に選ばせたので、かの女は子供たちにとっては自由であり、詩歌であった。それにひきかえ父はといえば、かれらをマドリッドでは貴族学院に、パリではコルデイエ寄宿学校に閉じ込め、永久に数学を学ばせる刑罰を課したというだけの人物に思われたのである。これらの理由によって、父の意見は息子たちの意見にはなんらの影響力をもたなかった。⁽¹²⁾

母親への、このような愛情と絶対的な服従が少年ヴィクトル・ユゴーの精神を支配していたのである。母の意見は同時にヴィクトルの意見でもあり、母と子の政治的・宗教的意見は完全に一致していた。

ユゴー夫人（ソフィー）は父と姉妹のカトリック信者の尊王主義の観念のなから、尊王の精神のみを受け継いだ。かの女は夫の意見とは反対に、常に変わることのない尊王派であった。しかし、終始ヴォルテール派（宗教には無関心な人）であり、これは父の意に反することであった。かの女は自分だけの信仰、半分は宗教のなから、半分は哲学のなから汲みとった独自の信仰をもっていた。⁽¹³⁾

かれ（ヴィクトル・ユゴー）の尊王の念は神の祭壇をもたぬ王座ともいうべき母のヴォルテール派の尊王主義であった。⁽¹⁴⁾

それゆえ、ヴィクトル・ユゴーの母について語ることは、ヴィクトル・ユゴーを語ることにもなるのである。

二、ソフィアの政治的意見

ブルボン家の復興はユゴー夫人にとって無上の喜びであった。夫を危い目にあわせはしないかという心配からその時まで抑圧していたかの女のナポレオンに対する憎悪が、束縛を解かれて急に外に表われたのである。皇帝はもはやブオナバルテでしかなかった。⁽¹⁶⁾

この第一次王政復古の日のエピソードのなから、われわれは容易にソフィア・ユゴーの尊王主義と反ナポレオン感情とを読みとることが出来る。この時代のユゴー夫人の政治的意見については疑問をさしはさむ余地はない。しかし、国民公会から派遣されたジャン・カリエが地方総督をしていた時代のナントにおいても、またジャコビニスムが支配していたシャトーブリアンにおいても、あるいはまた、国民公会の戦士、軍法会議検事のユゴー准佐⁽¹⁷⁾との結婚の時代にも、かの女は同じ政治的意見を持ち続けていたのであるか。この点にかんしては確かな資料がほとんど残存していないために史家・評家の意見もまちまちであり、歴史と伝説とが入りまじって推測の域を出ないものが大部分である。ヴィクトル・ユゴーはなぜかこの母を王党派の闘士としてしか描き出していない。⁽¹⁸⁾ブルターニュ地方の純朴な小市民の王様びいきの雰囲気の中で育てられたソフィアが、その政治的意見を大革命や帝政の時代にも変ることなく持ち続けていたということはあり得ないことではない。と同時に、そう断定するには大きな障害が存在することも確かである。

まず、幼少時代を過ぎたナントや青春時代のシャトーブリアンにおいて、かの女がジャコバン黨員からなんの嫌疑もうけず自由に暮らしていたという事実、次に共和国軍隊の戦士との結婚、少くともこの二点が、ヴィクトル・ユ

ゴリの母にかんする断定を阻む事実である。これに対しては、共和軍が王党派残党の掃滅を特にはげしく行ったヴァンデ地方において、「ボカージュ地方を逃げまわっていた」⁽¹⁹⁾この男勝りの「ヴァンデの女闘士」⁽²⁰⁾が「たった一日のうち十二人の僧侶を救った」⁽²¹⁾という伝説と恋の盲目性による説明が対峙するのである。史実と伝説の戦いは今始まったことではない。困難は史実を伝説や推測から切り離すことである。

ヴィクトル・ユゴリの母、ソフィー・トレビュシェは一七七二年六月十九日、ナントの中産階級の家に生れた。父、ジャン・フランソワ・トレビュシェはヴィクトルが書いているような「街から一回も出たことのない律気なブルジョアの一人」でもなければ、「船主」⁽²²⁾でもなく、雇われ船長として海上に在ることの多い海の男であった。この父は一七八二年二月十一日にプレストを出航したまま、インド洋の海上で不帰の人となった(一七八三年九月一日)⁽²⁴⁾。母はソフィーが八歳の時すでに死んでいた(一七八〇年八月十四日)ので、十歳にもならないソフィーは完全な孤児となり、母方の祖父ルネ・ピエール・ル・ノルマン・デュ・ビュイソンの家に身を寄せたが、間もなく同じナントに住んでいた父方の叔母、ロバン未亡人にひきとられた(一七八五年)。それから一八九四年にロバン夫人とシャトーブリアンに移住するまでの十年あまりを祖父ルノルマンの家やそのすぐ近くで過したのである。

祖父ピエール・ル・ノルマン・デュ・ビュイソンは、当時、地方の教養ある中産階級のかなりの部分にその例が見られるように、一七八九年の改革を熱狂的に受入れた熱烈な共和主義者であった。⁽²⁵⁾一七二三年頃ラ・ガルナッシュ(ヴァンデ県)に生れ、一七四六年にはナントから十四キロの小さな町サン・フィアクルでドウ・グレイヌ侯爵領の税務代訴人になった。その後一七五四年からナント初審裁判所の検事をも務めたが、革命運動の波が押し寄せて来た頃には共和派クラブを創立したりしてナントにおける革命運動の初期の煽動者になっていた。後にヴィクトル

の義父となるナント生れのピエール・フリーシュはその「回顧録」の中で、初級裁判所検事ルノルマンが不安におびえる一地主と、その頃交わした会話を次のように記している。

人心の動搖は一般的になっていきます。そこから新しい時代が生れ、フランス王は(十八世紀の)哲学者たちと氣脈を通じあつて、ついに自由な國民を治めることになりました。そして自ら「貴族」と稱する者に隸屬した人々はいなくなるでしょう。⁽²⁶⁾

一七九三年には國民公会の西部最高司令官ジャン・バチスト・カリエに革命裁判所判事に任命され、かれは恐怖政治までを受け入れてしまうのである。「かれは革命にかんじて自分と意見を同じくしない、古くからの知人たちとすべての關係、すべての音信を断つた」⁽²⁷⁾ほど革命的信念にもえ、かれが告発し、死刑を宣告し、追放したのは叛徒やみみずく党員ばかりではなく、自分の一族の者にまで及んだのである。「かれは自分の家から元修道女であつた娘と孫娘の二人に、命令された宣誓を行なおうとしなかつたとの理由で、いかなる種類の援助をもこばみ」⁽²⁸⁾、家から追放してしまつたのである。このような人物がナントにおけるルノルマン家とトレビュシェ家の家長であり、保護者でもあつた。それゆえ、一族のなかにも「愛國者」や「サン・キュロット」の仲間が多く、ソフィーの母違いの叔父、フランソワ・ルノルマン⁽³⁰⁾、弟のマリ・ジョゼフ・トレビュシエ⁽³¹⁾、ロバン伯母の娘婿、ルイ・フランソワ・マチス⁽³²⁾など、熱烈なジャコバン黨員やカリエの腹心の部下がソフィーを取り巻いていたのである。このような愛國者たちを近親にもち、かれらと同じ町に住んでいたソフィーが反革命の闘士であると考えるのは——不可能ではないにしても——少くとも大きな抵抗を感じざるを得ない。確かにこの場合にも例外は存在する。ソフィーの叔母にあたるローズ・エリザベートは聖ユルシュル会の修道女であつたし、姉のマドレーヌ・トレビュシエは恐怖政治の

時代にも聖ユルシュル会の修道女になりたいという望みを堅持し続けていた。⁽³³⁾ 原則的にはソフィーもこのような例外であり得るわけである。しかし、かの女がナントに住んでいた時代の思想的確証がなにとつとして見出されない以上、断定は不可能である。

一七九四年、かの女はロバン夫人と共にナントを去り、シャトーブリアンに移り住んだ。しかしシャトーブリアンとてジャコバンが支配している町であり、ソフィーのまわりにいたのはナントと同じ種類の親戚や友人たち⁽³⁴⁾であった。その四年間に起ったと伝えられている劇的な事件は、ラ・ルノーディエールがその舞台になっているのである。

ラ・ルノーディエールというのはシャトーブリアンの南に拡がる曠野の中にあるブチ・トーヴェルネという小さな村の教会の裏手にある土地家屋で、確かに十八世紀の始め頃から一八三一年までトレビュシェ家の世襲所有地であった。しかしこの土地家屋を相続したのはソフィーの父ではなく、その兄のルイ・モリス・トレビュシェ⁽³⁵⁾で、その息子の配偶者ルイズ・トレビュシェ夫人が当時の所有者であった。とはいっても血縁の絆が切れたわけではなく、またロバン伯母もブチ・トーヴェルネには土地や屋敷をもっていたのでソフィーをつれてしばしばそこに滞在したことがある。このことは村の教会に残っている証書に書かれたかなりの数のにぼる二人の署名が——最も早い時期の日付は一七八七年四月十六日（ソフィーは十五歳）、最後は一七九〇年二月十四日——証明している。⁽⁴⁶⁾ 後にヴィクトル・ユゴアが「ヴァンデ」と名指すのは正にこの地方なのである。

ロバン夫人がソフィーと共に暮した頃のシャトーブリアンは共和軍の駐屯地であり、そこに通ずる主要道路はいうまでもなく、この地方のあらゆる道は絶えず共和軍の兵隊にパトロールされていた。というのはシャトーブリア

ソンの駐屯軍は、その地方にある多くの鉄工場を確保し、通信網を守り、食糧を徴発することを任務としていたからである。これに対して、シャトープリアンの町を取り囲む曠野には反革命派のみみずく党員が横行して常に小競り合いを演じていた。この「匪賊ども」の指揮官のなにはプチ・トーヴェルネ生れのウルトビーズの騎士ル・メニャンという人物がいた。ところがウルトビーズの地主ル・メニャン家とラ・ルノーディエールのトレビュシェ家とはきわめて親しい間柄であった。ソフィーやロバン夫人の署名が多くの洗礼証書や結婚証書にル・メニャン家の人々の署名と共に見られるということが証明しているように、ソフィーは騎士ル・メニャンやその家族と親交を結んでいたのである。⁽³⁷⁾ただ前述のように、この署名はいずれもヴァンデの戦いより前のものではある。しかし革命中に教会に加えられた弾圧と迫害を⁽³⁸⁾考えに入れるとすれば、この両家の関係が革命で中絶されたとは断言できない。その意志さえあれば両家は親交を続けることが可能だったからである。かといってその間柄がひそかに続けられたという証拠も残ってはいない。ソフィーの知人で、当時みみずく党員として反革命に活躍したのはル・メニャンだけではなく、同郷の人々の大部分は多かれ少かれ、いたる所で反革命軍の共犯者になっていたということも出来るのである。ソフィーの叔母でラ・ルノーディエールの持主ルイズ・トレビュシェ夫人が長期間にわたってプチ・トーヴェルネの助任司祭であった非宣誓僧侶ベダール神父を匿まっていたという事実は共和軍の命令文書綴りと家宅捜索報告書によって確認されている。この叔母は「愛国者たち」から常にもみずく党のシンパであるという嫌疑をかけられていた。⁽³⁹⁾ともあれ、ソフィーが少女時代の最も美しい思い出をもち、強い愛着の感情で結びつけられているプチ・トーヴェルネのすぐ近くに四年間も住んでいながら、そこを訪れなかったとはちょっと考えられないことである。ここから反革命の闘士ソフィー・トレビュシェの伝説が生れたのである。それは、革命裁判所判事の祖父か

ら貰った良民証のおかげで共和軍から嫌疑をかけられることなく、自由にラ・ルノーディエールを訪ずれることの出来たソフィーが、その途中に横たわる曠野のなかで非宣誓僧侶に救いの手を差し伸べ、みみずく党員に危機を知らせ、時には共和軍に対する奇襲攻撃にも参加した、というものである。⁽⁴⁹⁾しかし伝説や想像ならば全く逆の伝説や推測も可能である。第一に、常に小競り合いが行われているきわめて危険な土地を通過して自分の土地も屋敷もないブチ・トーヴェルネにそれほどしげしげと通ったり滞在したと考えることは——あり得ないことではないにしても——無理を感じさせるものがある。その上、アンベール麾下にある共和軍が一七九六年にブチ・トーヴェルネで行った殺戮と破壊にかんする調査報告書によれば、掠奪にあった約五十軒の家のなかにはウルトビーズとラ・ルノーディエールが含まれ「トレビュシエ未亡人」〔ラ・ルノーディエールの持主、ルイズ・トレビュシエ夫人〕とソフィーの幼な友達「マリ・ル・メニャン、長女」と署名された「女市民ル・メニャン家の人々」の申告が記録されているが、ソフィー・トレビュシエやロバン夫人の名は全く見出せない。⁽⁴⁾それゆえ、ソフィーを「ヴァンデの闘士」とするに足る証拠はどこにも残されていないのである。「闘士」を主張する人々も常に「もし言い伝えられるところを信ずるならば……」とか「忠実に語り伝えられた伝説の中でしかソフィー・トレビュシエを知らないシャトーブリアン地方の古老の話しによれば……」⁽⁴⁹⁾などという保留条件を必ずつけているのである。シャトーブリアンやラ・ルノーディエールの事件は一七九四年から一七九七年の四年間に——もし実際に起ったとすれば——起っているのであり、これらの伝説が集められたのは一九二〇年から一九三〇年の間のことである。百三十年もの年月にさえぎられながら、どうして「忠実に語り伝えられた……」などといえるのであろうか？ 史実としてはっきりしているものといえ、一七九四年にナントからシャトーブリアンに転居するための通行証があるだけである。これは住居を

変えることではあっても政治的な環境を変えることにはならない。シャトーブリアンにおいても血縁や友人、そして家族にいたるまでが二つの陣営にわかれ、政治的意見を異にしていたということは確かであり、そしてソフィーがそのいずれに同調していたとしても、それぞれ違った物語りを作り上げることは容易である。しかしいずれにしても確証は残されていない。確実なことといえば次のようなことである。

ソフィー・トレビュシェは一七八九年に始まった社会改革に忠実なル・ノルマン家の急進的ブルジョアの環境に少女期と思春期を過したこと。

かの女の最も近い肉親のなかにはナントの革命勢力の最も積極的な活動家、恐怖政治のカリエ体制までを受け入れてしまった熱狂的な共和派が多くいたということ。

さらに、かれらはカリエが召喚された後は、反カリエの反動を恐れて「穩健派」の仮面をかぶってはいたが、その共和主義の精神までを投げ捨ててしまった——そうなるのはもっと後のことである——わけではなく、叛乱や内戦がかれらの物質的利益を危くするという理由で、あいかわらず、みみずく党員やその同調者を敵視していたこと。これですべてである。しかしソフィーやロバン夫人にしてみれば周囲の熱っぽい空気にもかかわらず、その政治的態度をはっきり表面する必要もなかったのではなからうか。ともかく、一七九四年にはソフィーのシャトーブリアンにおける生活に終止符が打たれる。パリでユゴー准佐と結婚するためである。

ジョゼフ・レオポルド・シジスベール・ユゴーとソフィー・トレビュシェの結婚についても不明な点が多く、確証のある事実はわずかし知られていない。

ライン軍団から義勇兵合同大隊と共に西部に転戦したユゴー准佐は一七九三年七月にナントに入城し、親友ミユ

スカール少佐の副官として、シャトレの鎮撫やアンドレの鉄工場守備にあたり、一七九五年十一月以降はシャトールリアンに駐屯して、その地区一帯、特にオーヴェルネ地区のみみずく党掃討、食糧徴発、輸送隊の護衛などの任にあたり、かずかずの勇名を轟かせていた。ミュスカールもユゴも、カリエのごとき残酷な指揮官ではなかったが、それでもなおブーグネの農民大量虐殺事件の責を直接おわねばならぬ共和国の戦士であり、⁽⁴⁴⁾いかに人情味豊かであっても、ヴァンデの叛徒やみみずく党員に、たとえひそかにもせよ、好意を持っていたと考えるのは全くの見当違いである。

ソフィーがこの共和軍の将校とどこで知り合ったかは不明である。しかし、「ヴィクトル・ユゴを語る」のなかに描かれているように、ナントのソフィーの父の家ではない。⁽⁴⁵⁾ソフィーの父はヴァンデの戦いが始まる十年も前にすでに死亡していたからである。この点にかんするヴィクトルの記述は歴史的な根拠を全くもっていない。現実はこのカトリック信者であった尊王派の父に代ってナントのジャコバン・クラブの会員で、一七九三年にはカリエにナント革命裁判所の判事に任命されたルネ・ピエール・ル・ノルマンが登場するのである。しかしユゴ准佐はこの判事と一面識もなかった。⁽⁴⁶⁾この事実が二人の出あいがないがナントではなかったということを示している。というの、もしソフィーがユゴとナントで識り合っていたのならば、かの女はまっさきに祖父に紹介していたであろうからである。とすればシャトールリアンであろうか？ おそらく、そうであろう。一七九四年以降、ソフィーはロバン伯母と共にシャトールリアンに住んでいた。しかしユゴがそこに駐屯したのは九五年十一月で、かれは翌九六年六月までの六カ月余りをシャトールリアンで過したのである。ユゴがパリに去り、十七カ月後の一七九七年十一月に結婚式がパリで行われる。ユゴがシャトールリアン駐屯後すぐソフィーと識り合ったとしても、恋

と婚約の期間はせいぜい六カ月、そして空白期間は十七カ月である。これだけを考慮に入れるにしても、恋の盲目的情熱ですべてを説明するのは無理である。まして、ユゴー准佐とソフィーの間に政治的意見のくい違いがあったと仮定すれば、ますますそれは困難になるであろう。要するに、この結婚はソフィー自身の個人的な意志でなされたものであって、他人から強制されたり、勧められたりしたものではないのである。ジャコビニスムのあまりの暴虐さに内心ひそかに恐れを感じ、共和国の前途に不安を抱くようになった祖父の一年余にわたる反対にもかかわらず⁽⁴⁵⁾、一七九七年にソフィーは弟マリ・ジョゼフとたった二人でパリに向って出発する。確かに独立心と意志の強固な女の行動ではある。しかし共和国軍隊と戦ったヴァンデの闘士のそれであろうか？ 共和軍将校と真向から対立する政治的意見をいadak女のそれであろうか？ ここでもすべての点がソフィーの政治的無関心または共和派的傾向を指し示しているのであり、それゆえ、この時代のソフィーはけっしてヴァンデの闘士ではなかったと断定できるのである。

オーヴェルネ地方、それはソフィーが少女期の最も美しい時期を過した土地であり、かの女はそこに住む親戚や知人になりたいは深い愛着をもっていたので、あるいは僧侶やみみずく党員を救ったことはあったかも知れない。もしそうだったとしても、それはかれらが同郷の人であったというだけのことか動機になっているのである。かの女はヴィクトル・ユゴーの小説「九十三年」のなかのミシェル・フレシャールのような無辜の農民が両派の戦いの渦中にまきこまれ、悲惨な運命をたどらざるを得なかった例をいくつか目撃していたに違いない。とすれば反革命の戦士を救ったことがあったとしても、それはソフィーがヴァンデの闘士であったという証拠にはならない。と同時に共和軍の手先となつて同郷の人々に敵対したという推測もなりたたない。ただ、かの女がちよくせつ接触して

いた肉親や知人のなかに多くの共和派がいたという事実からすれば、かの女も共和派に近い意見を抱いていたと考へるほうが王党派と見なすよりは妥当であろう。

後にソフィー・ユゴーは確かに「播ぎなき」⁽⁴⁸⁾王党派になつたのである。王政復古、いやボナパルト没落のはるか以前に、かの女はジャコバンもボナパルチストどもも十把ひとからげにして憎しみの坩堝のなかに投げ入れてしまつた。しかし、かの女の一八一四年の意見は一七九四年の意見の単なる延長ではない。新しいいくつかの事件がその間に起り、それがかの女を積極的な政治活動に直接参加させたのである。

今や問題はラ・オリ將軍との恋愛事件である。それはたんにソフィーとラ・オリ將軍との恋物語りではない。これがソフィーの——したがって、ヴィクトル・ユゴーの——戦鬪的な尊王主義の源泉になっているのである。

レオポルド・ユゴーとソフィーとの結婚生活ははじめからあまりうまく行かなかつた。二人の氣質、性格、趣味の不一致は明らかであり、その上ソフィーはパリの街を嫌い、しきりにブルターニュの故郷に帰りがつた。⁽⁴⁸⁾かの女は田園生活にあこがれていたもので、一七九九年四月、ユゴー准佐が再びライン軍団に編入されると、喜んでパリを離れた。しかし、あずけられたナンシーのレオポルドの生家においては、もち前の勝気な性格から、姑や小姑との折合いが悪く、ことごとく故郷に帰るといっては夫を脅迫した。⁽⁴⁹⁾その後、夫の任地変更によってリュネヴィル要塞、ついでヴィクトルの生地、ブザンソンへと居を移すのである。

ヴィクトル・マリ・ユゴーはブザンソンで一八〇二年二月二十六日に共和国陸軍第二十半旅団⁽⁵⁰⁾第四大隊長レオポルド・シジスベール・ユゴーの三男として生れた。その頃、ユゴーの隊内には半旅団長ゲタール大佐が退役軍人に支払わるべき金を不正着服しているという噂がひろまっていた。明確な証拠のつかぬこの横領事件でゲタール大

佐に公然と抗議を行ったことがユゴー准佐の立場を悪くし、いつのまにか謀反事件の首謀者にされてしまった。第一執政ナポレオンがモロー將軍に忠実だった軍人を軍隊内部の反ナポレオン勢力と見なし、うさん臭そうな眼で見ている時代であり、ユゴー准佐もモロー派と見なされていただけに、この事件は不幸な——というより不運な——出来事であった。⁽⁵²⁾ ヴィクトルの生後六週で集団懲戒処分による連隊移動のためユゴー准佐は家族を伴って新しい任地——まずエクス、つぎにマルセイユ——に赴任しなければならなかった。マルセイユについてからもかれの不遇は続きドミニカ島遠征軍に編入されんとするにおよんで遂にかれは妻をパリに送り、庇護者たち、特に信頼をおいているジョゼフ・ボナパルトの力を借りてゲタール事件の弁明をし、任地の変更を願い出ようと決心した。ソフィ・ユゴーは一八〇二年十一月二十八日、三人の子供を夫の許に残し單身パリに出発した。ソフィの不在は九カ月におよんだが、この間ユゴー准佐はコルシカ島からエルバ島へと残された子供を連れて移動しなければならなかった。この別居生活がユゴー夫妻の間に決定的な溝を作ってしまったのである。夫はエルバ島のポルト・フェブリーヨでカトリーヌ・トマ・セシル⁽⁵³⁾という小娘と同棲し、妻はパリで旧知のヴィクトル・ファノ・ドゥ・ラ・オリ將軍と結ばれたのである。ラ・オリ將軍の優雅、趣味の良さ、上品さはユゴーの俗物性とよい対照をなし、この点だけでもソフィは夫に欠けている思慮深さ、謙虚さとしみじみと味わざるを得なかった。その上過去の生活がよく似ていたために、ものの考え方や見解にも多くの共通点を見出せたのである。

ラ・オリはソフィと同じようにフランス西部の出身で八十九年の改革を好意的に迎え入れたブルジョア⁽⁵⁴⁾の家庭に育った。その父は大胆で熱心な共和主義者であったが、ラ・オリ將軍の姉妹のなかにはソフィの場合と同じように二人の修道女が含まれていた。⁽⁵⁵⁾ かれは九十三年に軍隊に入り、イタリー、ドイツに戦い、共和国軍隊の將軍モ

ローの片腕とまでいわれ、一八〇〇年頃には共和国將軍として赫々たる未来を期待されていた。だがラ・オリ將軍もユゴー准佐と同じようにあまりにもモロー將軍に近すぎたのが不運のもとであった。当時の表現によれば、運命の壺から出てきたのはモローの名前ではなく、ナポレオンの名前だったのである。このためかれは自ら現役を退き、年金を拒否して、始めは不満派のなかに、そしてまもなく反ナポレオン派に身を投じた。⁽⁵⁶⁾ ユゴー夫人が夫の事件のために単身パリに來たのがちょうどこの時期であった。二人が結ばれた後、ソフィーは一人はエルバ島に戻るが、一カ月足らずの滞在の後、今度は三人の子供をつれて再びパリに戻った。しかしパリに着いてみると、ラ・オリ將軍はジョルジョ・カドゥダルの陰謀事件に捲き込まれ逮捕状が出されていた。ラ・オリ將軍がこの陰謀事件に加担した証拠はなかったが欠席裁判はかれに死刑を宣告し、ついで刑一等を減じて国外追放を宣告したのである。モローのようにアメリカへ亡命することもなく、六年もの間、隠れ家を求めて転々としていたラ・オリをソフィーがフィアンチーナの庭の奥にある古い礼拝堂に匿まったことは「ヴィクトル・ユゴーを語る」に述べられているとおりである。警察はかれが動き出さない限り放置しておく方針であったが、フーシェが警視總監の地位を追われ、サヴァリがその後任におさまると（一八一〇年六月）この旧友は卑劣な手段を用いてラ・オリを逮捕し（一八一〇年十二月三十日）ヴァンセンヌの牢獄に投獄した。⁽⁵⁸⁾ ラ・オリが新たにマレの陰謀に加わるには牢獄が必要だったのである。事実マレの陰謀はヴァンセンヌの牢獄とデュビュイソン医師の施療院で一年以上もかかって企てられたもので、ラ・オリは早くからこの秘密会議に参加していた。⁽⁵⁹⁾ しかし、ヴァンセンヌにたびたびラ・オリを訪れ、マレの陰謀に参加する決心を固めさせたのはソフィー・ユゴーである。その結果はマレから出たナポレオン戦死の虚報に踊らされて就任した四時間の警視總監（一八一二年十月二十三日）、再逮捕、軍事裁判、そして銃殺（一八一二

年十月二十九日)であった。こうしてソフィーの愛する人は六年の追放、二年の拘留の後ナポレオンに殺されたのである。ナポレオンに対して抱いていたソフィーの憎悪が復讐の念に変わるのには容易であった。かの女はその復讐をブルボン家の帰還のなかに求めたのである。当時反ナポレオンの立場は王党派に求める以外に仕方がなかったであり、それゆえにこそ、決して生えぬきの王党派ではなかったラ・オリヤ、モロー、マレ、ピシユグリなどの反ナポレオン派は王党派の陰謀に加わらざるを得なかったのである。ソフィーにとって王党派への変節はより容易であった。これらの事件を経てこそ、ソフィーは始めて熱烈な王党派の闘士に生れ変わることが出来たのである。その後、この意見は死にいたるまで変ることがなかった。

三、ソフィーの宗教的感情

当時、「ヴァンデ」という言葉は単なる地名としてではなく、最も根強い反革命勢力であった王党派を想起させる特別の響きをもっていた。その上、それは必然的、自動的に「信心深い」「カトリック信者」という言葉に結びつくのである。⁽⁸⁾ 事実、ヴァンデにおける初期の戦いの多くは宣誓を拒んだ憎侶が信心深い農民を煽動して起したものであった。しかるに「ヴィクトル・ユゴーを語る」によれば、王党派のソフィーは「常にヴォルテル派であった。」⁽⁹⁾ かの女が無自覚な共和派——十中八九こういえるであろう——から出発して後に毅然たる王党派になったことは確かである。と同時に終始ヴォルテルを信奉する理神論者、あるいは宗教的無関心派であったとすると、一般的な公式にあてはまらないこの奇妙な組合せの源泉をどこに求めればよいのであろうか？ ここでもまた、根拠のある確実な事実と単なる伝説とをはっきり区別しなければならぬ。

一般的にいえば、宗教的感情というものはその人の生れた土地、家族、接触する人々、社会環境、時代などというものに無関係に生れたり、成長したり、あるいは死滅するものではない。このようなわけで十九世紀全体を通じて「王党派」と「カトリック信者」という切り離し得ない結合が生れたのである。しかし、この組合せはソフィ・ユゴーのみならず、ヴィクトル・ユゴーの場合にも破られ、きわめてめずらしい——ヴィクトルの表現によれば「奇妙な」——結びつき、つまり「カトリック信者のものではない尊王主義」または「ヴォルテール派の尊王主義」⁽⁶²⁾という特別なケースが存在すると主張されるのである。もちろん、ヴィクトルの母にしても、ヴィクトル自身にしても、政治と宗教はおたがいに緊密な相互依存の関係を保っているものであり、それゆえにこそ政治的意見をさきに決定しなければならなかったのである。

ユゴー夫人、ソフィ・トレビュシェの家系には聖ユルシュル会の修道女になった信仰心のきわめて篤い伯母と姉がいたことはすでに述べた。しかし、ソフィーについては、かの女は「母を失ったため他の人よりも早く一人前の女にならねばならなかったので、母親のいない娘によくありがちな例の強い独立心と、はきはきした個性をもっていた」ので、信仰の分野でも独自の信仰をもち、「信仰においては王も神も区別していなかった」信心深い父からは、その信仰の半分、つまり尊王の精神だけを受け継ぎ、「王座に対してのみ敬虔だ⁽⁶⁴⁾。」と「ヴィクトル・ユゴーを語る」は伝えているのである。航海で不在がちな父、しかもソフィーがわずか九歳の時に最後の航海に出て不埒の人となった父がかの女にどれほどの精神的影響を及ぼし得たであろうか？ 確かに長期にわたる父の不在がたびたびあったにもかかわらず、その家庭はきわめて円満であり、たいそう敬虔であった。一七七三年に父ジャン・フランソワが西インド諸島に出航する直前に妻に宛てた手紙がこのことを証明している。

今ここで神の足下にひざまづき、おまえさまになに一つ欠けることのなきよう、またわたしがおまえさまと共に人生を全うすることの出来るようお願いしております。神よ！ われらが子らの上にも同時に祝福をさずけられ、かれらがのちのちまでわたしちに慰藉をもたらずものになるようお願いもうしあげます。

これを読めばソフィーの父が単なる海の荒くれ男ではなく、優しい夫であり父であったことが、また信心深い人であったことが判明する。このような宗教的感情については父親のみならず母親においても同じことがいえるのであって、ソフィー・トレビュシェの教育は両親の下にあって、また母の死後、父が最後の航海に出かける際に姉と共にあずけられたムナン・デュゲ塾に⁽⁶⁶⁾あっても、当時のキリスト教の宗教教育であった。このような敬虔な宗教的環境のなかで幼時を過し、最初の教育を受けたソフィーが一八一四年にはなにゆえにヴォルテル主義者——「ヴィクトル・ユゴーを語る」が正しいとすることではあるが——になつていたのであろうか？ 養母ロバン夫人の影響であらうか？ または祖父ルノルマンの影響なのか？ ここでも、ここからさまざまな伝説が生れたのである。

まず、史実から百年後に古老の口から集められた伝説を挙げねばならない。

ヴィクトルの母はヴォルテルの悲劇に夢中であつた。しかもナントにおいては、年頃の娘にとつて街の劇場に行つて悲劇をきく以外にたいした娯楽がなかつたのである。かの女は芝居が演じられるのを見ていただけでは満足せず、学問はなかつたがその一部を覚えてしまい、長台詞のいくつかはそれで全部暗誦することができた。⁽⁶⁶⁾

これはただ単にソフィーが芝居が好きだつたということをいい表わしているにすぎない。かの女がヴォルテルに

心酔していたとすれば、それはヴォルテールが当時舞台の王であったからであろう。もし、ソフィーの暗誦する台詞が、「神よ！ 余は汝の栄光のために六十年間戦えり。」⁽⁶⁷⁾ だったり、「ザール」の他のキリスト教的な長台詞だったりしたら、かの女のヴォルテール主義はどうなるのであろうか？

この伝説の三十年後にはヴォルテールの芝居に熱中するのはもはやソフィーではなく、伯母ロバン夫人である。ロバン夫人はトレビュシェ家の一員で海の男ジャン・フランソワの実姉である。この人が孤児になったソフィーをひきとり、一七八五年から一七九七年まで、いいかえればソフィーが十三歳から二十五歳にいたるまでナントとシヤトーブリアンで母の代りをしてくれた人である。ロバン夫人についての伝説は「トレビュシェ家に伝わる昔話し」からとったもので、一九一三年にピエール・デュボアが次のように発表している。

その昔話しがロバン夫人はナントの劇場に足繁く通い、十八世紀の哲学者や小説家の作品を好んで読んだヴォルテール崇拜者であったことを肯定している。⁽⁶⁸⁾

これは非常に正確のようであるが、同時にあいまいなところを残している記述である。もしロバン夫人が芝居や読書をそれほど好んだのであるならば、なぜその時代——十八世紀——だけの戯曲や小説に満足していられたのであろうか？ しかし、ここに提出された問題、即ちヴォルテール崇拜者はソフィーかロバン夫人かという点は、要するに伝説の部類に属するものではある。

かの女たちの教養は、筆跡という点からみるとかなり凡庸なものであったらしい。その例としてヴァンザックはフランス国立図書館所蔵の手稿第二三、七七七号をあげており、ブルドーはその「覚え書」のなかで、オーヴェルネ小教区の記録文書に残るロバン夫人の署名は「文盲のそれとほとんどかわらない。それはトレビュシェ家の数あ

る署名のなかでも最も苦勞して書かれたものである。」と断言している。他の史家も「ロバン伯母が残した震え字の署名——かの女はロバン夫人(Lea Rohm)と署名していた——のある正統な記録文書のみに限っても、かの女は殆んど無学文盲の感を抱かせる。」と同じような証言をしている。ソフィーについても全く同じことがいえるのであって、その証人はソフィーをヴォルテール崇拜者にしたてたマセ・ドゥ・シャルである。かれは「その(ソフィー)の筆跡は小学生なみで角ばり、ひじょうに力をいれて書かれており、大文字とも小文字ともつかない字の羅列である。かの女の手紙の本文は下書きの上を苦勞してなぞったものに違いない。」と証言しているのである。もちろん字の巧拙が必ずしも教養の有無と関係があるとは限らないが、これらの証言は単なる字の巧拙以前の問題であるかのように思われる。はたしてロバン夫人やソフィーが十八世の劇、小説を読んで楽しみ得たか？ まして哲学書を理解し得たか？ これははなはだ疑問である。しかしソフィーがフィアンチヌにおいては、たいへんな読書家であったというヴィクトル・ユゴーの証言も考慮に入れなくてはならない。だがいづれにしても、ソフィーの場合には「ヴォルテール主義」という言葉をこのような文学的な意味において捕らえようとしても無駄である。それは宗教的な意味において捕らえられねばならない。

ナントを中心とするブルターニュやヴァンデ地方では、恐怖政治に先立つ数年前まで——いや恐怖政治のさなかにおいてすら——強固な宗教組織が残っており、人々の信仰心はひじょうにあつく、宗札などのお勤めもさかんであった。ソフィーの家族や親戚のような場合にしても、長い世代にわたって聖職を天職とするものがかなり多数出ているのであって、革命中の宗教団体の廃止もルノルマン革命裁判所判事の不興もソフィーの伯母ローズや姉マドレーヌの聖職への誓いを破壊することが出来なかった。それゆえロバン夫人によるヴォルテール主義的教育——ロ

バン夫人がヴォルテール主義者としてのことであるが——に先立ってソフィーがその地方的な、また家族的な環境の中で長い間キリスト教の宗教教育をうけていたことは確実である。とすれば、われわれは一七八五年（ソフィーがロバン夫人にひきとられた年）、あるいは一七八九年から始まるソフィーとキリスト教との訣別を証明しなければならぬ。この訣別は、しかし、急激に起つたものではなく、まして哲学的考慮によって決心されたものではない。またキリスト教への信仰を突然棄てたわけではなく、始めはキリスト教信仰の外部的表明やお勤めとの訣別に止まっていたが、それがしだいに信仰そのものへの訣別となってゆく過程をたどるのである。たとえこの漸進的な離脱が仮説であつたとしても——というのはその間の段階をいちいち証明できないからであるが——ル・ノルマン判事存在、近親の影響、九十三年の弾圧と強制などを考慮にいれば、きわめてあり得ることであり、その里程標をひとつひとつ立てて行くことはさほど必要ではない。なぜならば、信教の自由——宗教協約以前にあらる程度の自由はあつた——が帰つて来ても、また憲章によってカトリック擁護が宣言された時にも、ソフィーはキリスト教信仰をとり戻すことがなく、尊敬するフランス王の宗教でもあり同時に憎悪の的であつたボナパルトの宗教でもあつたキリスト教よりは「良心の宗教」の方を自分のためにも、子供達のためにも選んでゐるからである。この宗教に関する個人主義は、どこにその源泉をもち、またそれがどのようなものであつたにせよ、確実な事実である。ソフィーが恐怖政治の嵐の中をナントで過したことをあまり強調する必要はないが、やはり忘れてはならないのは早くから新思想を受け入れ、革命裁判判事として最後までカリエ体制に力を貸した祖父ル・ノルマンがかの女の保護者であつたことである。正義派のこの祖父は、革命的信念から多くの非宣誓僧侶や叛徒たち、しかも自分の娘と同じ聖ユルシュル会の修道女にまで死刑を宣告した人物である。この人のおかげで青春を無事に過ごし得

た孫娘ソフィーが祖父の意見を自分流儀にわかち持ったとしても、それは自然のなりゆきであらう。

一七九七年十一月十五日、パリで行われたユゴ―准佐との結婚が市民結婚であったことも容易にうなずけることである。「ヴィクトル・ユゴ―を語る」は当時「宗教結婚というものは存在しなかった。その時代には教会は閉鎖され、僧侶たちは逃げるか身をかくしていたので若者たちは苦勞して僧侶を見つけようとはしなかった。新婦は司祭の祝福を一応は希望したが、新郎は全く望まなかつた。」と述べている。なんの歴史的根拠もないことである。宗教協約(一八〇一年七月十六日)成立後にあらためて神の前で宗教による結婚をしようとすれば出来たのである。のみならず、一七九七年においてすら、その意志さえあれば宗教結婚は可能だったのである。確かに、一七八九年には僧侶に対する迫害が再び激化したが、しかしユゴ―とソフィーが結婚式をあげた一七九七年はテルミドールの反動にともなう宗教的反動によってすべての僧侶に祭祀の自由が認められパリにおいても宣誓、非宣誓を問わず多くの僧侶が見出された時代なのである。なによりの証拠はヴィクトル・ユゴ―夫人、アデルの未発表の次のようなノートである。⁽²⁵⁾

わたくし(アデル)の父と母(その結婚はユゴ―夫妻のそれと同じ日に行なわれた)は二人共信者だったので教会を望んでいた。一人の宣誓(原文通り。明らかに非宣誓の誤り)僧侶がある個人の家でかれらを結婚させた。これが、ユゴ―夫妻には宗教結婚の意志が全く欠除していたことを証明しているのである。

ラ・オリ將軍は、前述のごとく、ソフィーの場合ときわめて類似した家庭環境——姉妹のなかに二人の修道女がいたことにいたるまで——に育ち、新思想を受け入れた革命軍の將軍であった。後に反ナポレオン陰謀に参加し、政治的には王党と結んだが宗教的には十八世紀風の考えの持主であり、ヴァンセンヌの牢獄で枢機官、司教僧会員

などとの会談に加わったのは純粹に政治的理由によるものであった。要するに、かれは古典的教養と十八世紀の哲學に支えられたユマニスト的懷疑派であつた。

夫レオポルドにいたつては、スペインの僧会員について、「宗教は無智か心の弱さから生れるものである。」といつてゐるような單純な反宗教派であつた。⁽⁷⁶⁾

このように反宗教派や無関心派がソフィアの周囲を取り巻いていたのであり、事實ソフィアの數少ない手紙の中でもキリスト教どころか理神論のごときものすらほめかされてゐない。一八一〇年、祖父ル・ノルマンが死去した時に弟マリ・ジョゼフに宛てたソフィアのお悔みの手紙⁽⁷⁸⁾でさえ次のような調子である。

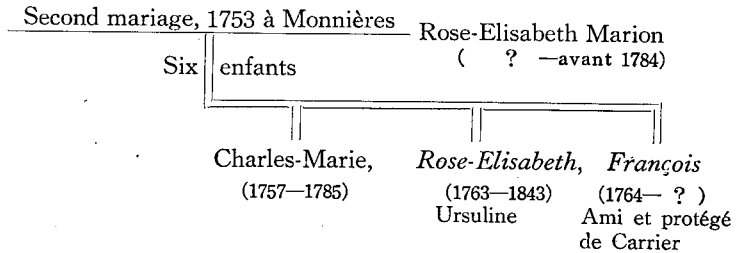
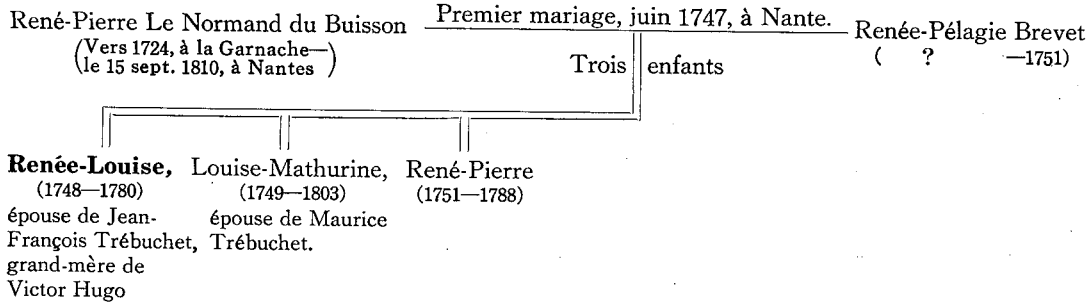
あなたの悲痛なお氣持はわたくしも共に身に泌みて感じております。あのご高齡では、なお末永くこの世にお祖父様をおとどめする望みはほとんど残されてはゐなかつたのですが、それでも面倒をみてこられた方々とのこの突然の永遠の別離にはやはり愕然といたしました。これは人たるものの最大の苦惱の一つであり、こよなくいとしい愛を注いだ人々のために誰しもが一生に一度ならず味わねばならぬものなのです。自分のあとに残して行く人々に涙を流させる順番がまわつてくるまで、この残酷な必然性に身をまかせよう努めましょう。理性的で完全にストイックな瞑想、心然性の徹しい哲學のなかに慰めを求める深い苦惱——通常、女性の心にこのような感性を見ることは稀れである。この手紙のなかでは幼時にはもつていたであろうキリスト教信仰はソフィアの心から完全に消え去つてしまつてゐるのである。

四、ヴォルテール派の尊王主義

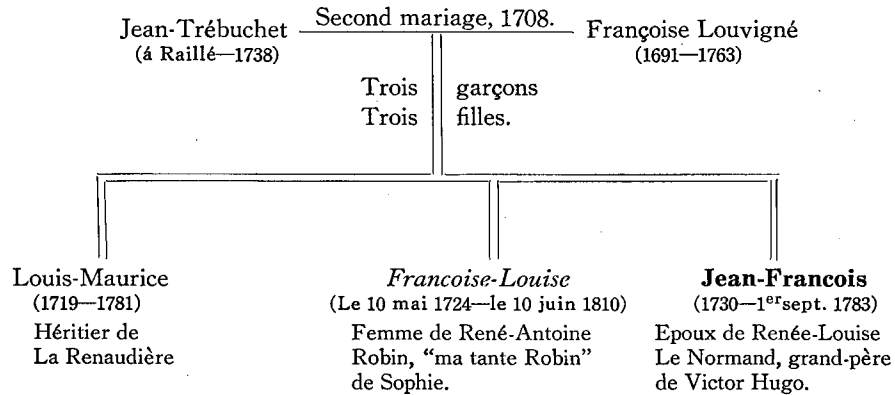
以上のように、ソフィーの尊王主義は直接にはナポレオンや夫レオポルド・ユゴーにたいする憎悪から生れたものであり、ラ・オリ將軍を始めとする反ナポレオン勢力の友だちの影響によるものであった。それゆえ、ヴィクトル・ユゴーの表現《Ma mère Vendéenne》を「わが母、ヴァンデの闘士」とすることは、帝政崩壊直前のマレ陰謀事件の時を除いては、行き過ぎであつて、郷土や同郷の人々に対する本能的な愛情がソフィーの心の奥底にひめられていたという意味でなら、単に「ヴァンデー生れのお母さん」と解すべきものであろう。しかしこの表現が使われている前後関係からすれば、ヴィクトルは明らかに前者の意味で用いているのであり、これはヴィクトルの無智または誤解によるものである。ましてヴァンデの戦いの舞台で、ボンシャン夫人やラ・ロシュジャ克蘭夫人のごとき反革命の闘士と同列におくことはできない。ソフィーは根っからの王党派ではなく、王党派になつたのである。ヴォルテール主義についても、ソフィーは幼い時に宗教的環境と切り離されたために、しだいに宗教そのものに無関心になり、ナポレオンへの憎悪が帝国の宗教を完全に棄てさることへ拍車をかけたのであろう。このヴォルテール主義という言葉も、積極的な意味で理神論を信奉していたとか、十八世紀風の実証的哲学を身につけていたというのではなく、宗教にたいする無関心が、その強い意志と冷静な理性とによつて時に哲学的表現をされることがあつたということである。

ここに、ヴィクトルの言葉の通り、尊王主義とヴォルテール主義との奇妙な結びつきが、少くともソフィーの晩年には存在したと断言することが出来るのである。

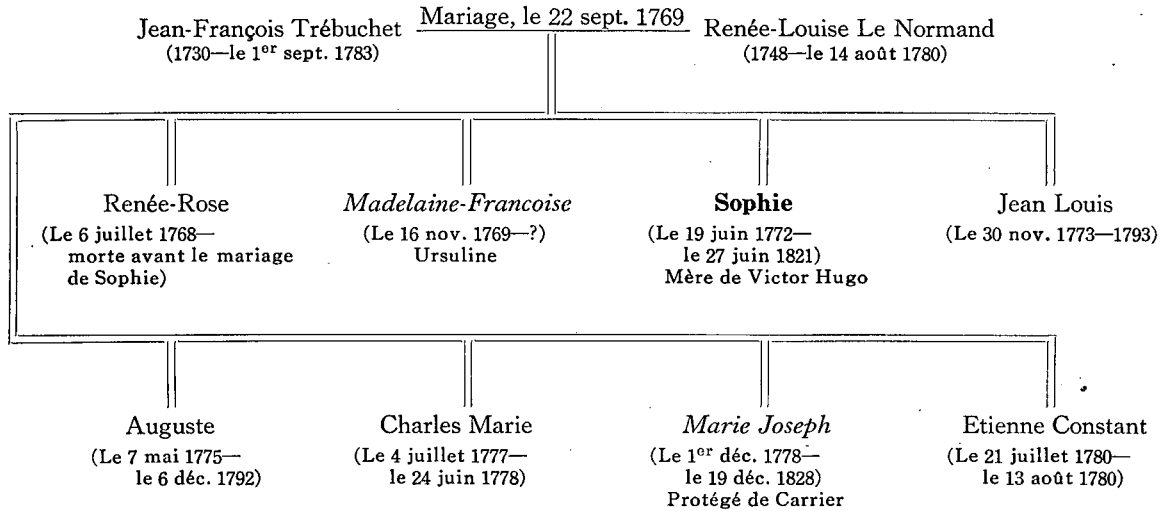
Le Normand 家の系図



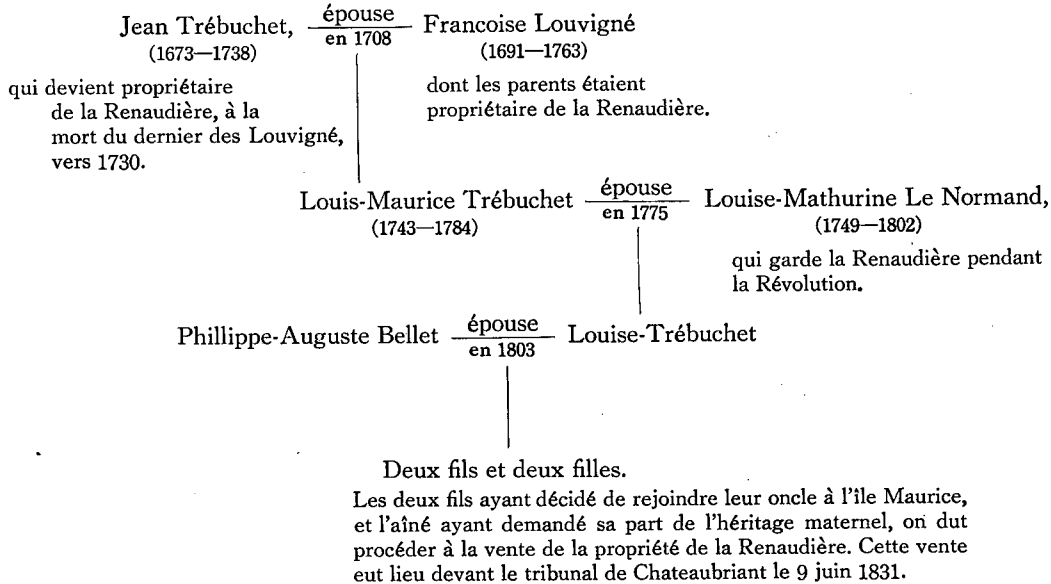
Trébuchet 家の系図 (I)



Trébuchet 家の系図 (II)



La Renaudière の相続者



註

(1) 一八四九年に、大統領ルイ・ナポレオンは普通選挙に大きな勢力をもっていたカトリック派の御機嫌をどううとして、ローマ法王のためにマツチーニのローマ共和国に反対する遠征軍を組織した。これに対する左翼の示威運動を口実として政府は出版と集会の自由を取り消し、カトリック派のファルーが提出した「ファルー法」という教育法が教会と大学の同盟を事実上確立してしまった。また自由主義を捨てたカトリック派のモンタランベールも「国内にローマ遠征をしなくてはならない」などの暴言を吐いた。ヴィクトル・ユゴーはファルーやモンタランベールのごとき宗教人がこのような正義に反した言動を弄し、ローマ遠征軍を組織したルイ・ナポレオンのためにシブール大司教が「^{テ・デウム}e Deum」を捧げるに及んで、それまでは遠慮していたカトリック教に対して真向から対立し、完全に訣別をした。

cf. Henri Guillemin : Hugo et son poème « Dieu », thèse publiée dans « Europe » 74—75, Numéro spécial de fev.-mars 1952. « Victor Hugo a cent-cinquante ans », p. 98. マンズン・モロ著「フランス史」下、五一九頁(新潮社版)

(2) V. H. R. II. xxxiii. Un mot de chateaubriand. P. 100

(3) ヴィクトル・ユゴーが己れを語ったテキストは多いが次のようなものがあり、その弁明は矛盾している。

(a) *Littérature et philosophie mêlées* [1834] 「誠実な政治的意見の内部の革命の歴史」、「相次ぐ経験の連続」、「一八一八年のヴォルテール派の尊王主義、今日では失われているニュアンス」、「すべて正反対のものの対話」、「矛盾するいくつかの思想」、「矛盾」、「最も混乱した積み重ね」、「混沌」、「今日では失われた……奇妙な多様性……奇妙だが真実のニュアンス」 etc.

(b) *Écrit en 1846* [1854] 「ヴァンデー派の青春」、「王政派の過去」、「しかし、心の奥底では、何一つとして変化したものはな^さ」 etc.

(c) *レ・ミゼラブル* [1845～1860] マリユスの青春はヴィクトル・ユゴーのそれであり、マリユスの進化はかれの「内部の政治的变化」である。「混合体」、「きわめて特異な思想の組合せ」、「ヴォルテール派の尊王主義、奇妙な変化」 etc.

(d) *William Shakespeare* [1865] 「王党派の片言」、「君主政治、カトリシズム、貴族政治の表面。」 etc.

(e) Actes et Paroles. Introduction du t. I. Le Droit et la Loi. [1875] 「この男は多くの誤り」や「連続的な錯誤」のなかを通過してきたが「かれの人生の統一性」について語ることが出来る。「奇妙に真実なニュアンス」、「正統王朝派とヴォルテール派」、「文学的クリスチャン」etc.

(f) 以上の他に Mme Hugo : Victor Hugo Hugo raconté par un témoin de sa vie [1863] がある。「ヴィクトルは生活の習慣と政治的信念において母に従順であった。」「かれのヴォマンテールの意見を熱烈に表明した。」「母のヴォルテール派の尊王主義からシャトーブリアンのキリスト教徒の尊王主義に移った。」etc.

(4) V. H. R. の「キリスト教徒の尊王主義」その他の肯定と Actes et Paroles の「文学的クリスチャン」などの否定。

(5) G. Venzac : Les Origines religieuses de Victor Hugo. p. 8~11.

(6) 「宗教と王国」という公式は有名なもので、ボナルドの「権力の理論」からバルザックの「人間喜劇の序文」にいたるまでいたる所に見される。cf. Conservateur, I, 343—344. 「われわれが擁護する大義は宗教と正統王朝継承権のそれである。」王党派は「王国と宗教の一大共同体を形成しようとする。」VI, 387. 王党派は「フランスにおいては神と王が支配すること」を「欲しよう」と etc. cf. G. Venzac : op. cit. p. 449~450.

(7) エルム島出発は一八〇三年十一月 (cf. L. Guimbaud : La Mère de Victor Hugo, p. 138.) ヌリ到着は一八〇四年二月十六日。

(8) エルム島で父と離別して以来、ヴィクトルが父にあつたのは次の四回である。しかもその四回も離婚訴訟騒ぎなどで父と同居したことは一回もなかつた。

一八〇八年……イタリアのアザルリノ。

一八一一年……スペインのバエリツ。

一八一四年……ヌリ。

一八一五年……ヌリ。

(9) cf. P. Berret : Victor Hugo. p. 39. et p. 53.

(10) cf. V. Hugo : Correspondance, I, p. 70, 24 nov. 1821.

ヴィクトル・ユゴーの宗教的感情の源泉 (杉山)

- (11) 母親への親孝行ぶりを發揮して、アデルに会わぬことを誓った。cf. A. Maurois : *Olympio ou la vie de Victor Hugo*. p. 82.
- (12) V. H. R. II, p. 97~98.
- (13) *Ibid.* I, p. 10.
- (14) *Ibid.* II, p. 216.
- (15) *Ibid.* I, p. 189.
- (16) Jean-Baptiste Carrier (1757—94) はじめ代言人、国民公会の議員でノルマンディおよびブルターニュに派遣され、ナントの叛徒を死刑に処するにあたって、その残酷さで有名になる。ブフェイ広場の死刑執行やロワール河での溺殺刑はよく知られている。一七九四年十二月よりで処刑さる。
- (17) 下ライン地方の義勇兵合同大隊付准佐に任命されたのが一七九三年五月二十一日で、その後ナントに転戦し、九十六年九月十四日、ハリ第十七師団歩兵師団副官、九十七年五月十九日に上記師団の第二軍法会議検事に任命さる。その後九十九年四月二十九日に第二十戦列歩兵半旅団に転任するまで、軍法軍議検事の任にあった。
- (18) cf. Préface des Feuilles d'Automne. [Sa (= de V. Hugo) mère, pauvre fille de quinze ans, en fuite à travers le Bocage, a été une *brigandé*, comme Mme Bonchamp et M^{me} de La Rochejaquelein.] Ce siècle avait deux ans © Ma mère vendéenne. [Les Feuilles d'Automne, p. 11 et p. 15.] * 又 Ecrit en 1846. ©
- Quoi ! parce que ma mère en Vendée autrefois
Sauva dans un seul jour la vie à douze frères :
- ◎ 1) 又 和 語 訳 (Les Contemplations, p. 259.) なり多敷。
- (19) Préface des Feuilles d'automne. Les Feuilles d'Automne, p. 11.
- (20) Ce siècle avait deux ans. v. 78. *Ibid.*, p. 15
- (21) Ecrit en 1846, II, v. 140~v. 141. Les Contemplations, p. 259

- (23) V. H. R., I, p. 10.
- (23) P. Dubois : Victor Hugo, ses idées religieuses de 1802 à 1825 (1913) p. 1. G. Venzac : op. cit. p. 115—116. その他多数。
- (24) P. Dubois : op. cit. p. 2, et E. Benoit-Lévy : La jeunesse de Victor Hugo, (1928) p. 5. はゴッセルト出航を一七八二年六月とシ、G. Venzac : op. cit., p. 116. は二月十一日。またかれが死んだのはイール・ド・フランスではなく、ポール・ルイの近くの海士トである。cf. Ibid.
- (25) 一七八〇年代の初め頃には、地方の教養あるブルジョアの一般的風潮は、「政治にかんしては数々の不満をもち、税金をのろろ、宮廷をひどく嫌っていた」ので、一七八九年の社会改革を喜んだものが多かった。cf. A. Maurois : René ou la vie de Chateaubriand(1938), p. 32—33. P. Dubois : op. cit. p. 12—16.
- (26) P. Foucher : Souvenirs de la belle-famille de Victor Hugo, (1929) p. 17.
- (27) P. Dubois : op. cit. p. 14—p. 15.
- (28) 娘は Rose Elisabeth Le Normand(1763—1843) 孫娘は Madeleine Trébuchet(1769—1859) である。マドレーヌの方はヴィクトルの母、ソフィー・トレブュシエの姉で、一七八八年にはまだ見習僧だったのであり、修道女になったのは宗教協約後の一八〇六年である。G. Venzac : Op. cit. p. 95. しかし、かの女らは一七九二年十月一日に聖ユルシユル修道院が閉鎖されるまで、そこを離れなかつた。cf. E. Biré : Victor Hugo avant 1830(1895), p. 37.
- (29) P. Dubois : Op. cit. p. 15. p. 24. et p. 85. n. 1.
- (30) François Le Normand(1764—?)ルネ・ユエル・ル・ノルマンの後妻の子で、前述の修道女ローズ・エリザベートの弟にあたる。ヴァンサン・ラ・モンターニュ倶楽部(ジャコバン・クラブ)の書記をしていたが、カリエが国民公会から派遣されて来た後に、妻のルイズ・ガンドリユエがカリエの妾になったので、望む地位を与えられる。聖ユルシユル会の聖ヴァンサン教会の建物のなかに設立された陸軍平等病院の管理者、つぎにヴァランシエンヌの戦争委員になる。P. Dubois : Op. cit. p. 9. G. Venzac : Op. cit. p. 94—97.
- (31) Marie-Josephe(1778—1828)一七九四年には、叔父フランソワの下で陸軍平等病院の書記。一七九九年にはロワール・

アンフェリワールの自由軍の中尉。ここでナポレオンの天下になると、転向して、一八一〇年には帝国政府のナント知事の秘書官長。もう一回転向して、一八二〇年には王政復古政府のナント知事の秘書官長になる。ジャコバンがウルトラ王党派にまで転向することになる。G. Venzac : *Op. cit.* p. 97—98.

(32) Louis-François Mathis ナントの貿易商人で、ナント地方の池沼の乾燥枯渇の任にあたる共和国の総支配官であった。

Ibid. p. 99 et p. 132.

(33) 註(28)を参照。

(24) 親戚の者には、一七九三年にムワドンの鉄工場の副管理官に任命され、一七九四年にみみずく党員に暗殺されたオーギュスタン・ロシエ Augustin Rocher フォルジエ・ヌーヴの鉄工場の持主ベル Bellet 一七九四年二月十九日の大祭の時、理性の女神に選ばれたシシー・ドウ・ラ・シユメリエール Sisie de la Chenelière などが出た。G. Venzac : *Op. cit.* p. 101.

(35) Louis-Maurice Trébuchet(1719—1781)ソフィーの父方の祖父ジャン・フランソワ(1673—1738)とその後妻フランソワーズ・ルサイニエ(1691—1763)との間に生れた一番上の子で、ラ・ルノーディエールはこの後妻のルサイニエ家の所有地だったのである。ルサイニエ家の家系が断絶した一七三〇年頃になってトレブュシェ家の世襲財産になる。そして一八三一年売却された。cf. G. Venzac : *Op. cit.* Note II. p. 642—643.

(36) cf. *Ibid.* p. 104.

(37) cf. *Ibid.* p. 105—106.

(38) 一七九〇年二月に修道僧が廃止され、一七九〇年七月十二日には僧侶民事基本法が可決され、在俗僧までが再組織され、同年十一月二十七日に僧侶民事基本法に忠誠を誓うことが要求され、宣誓僧侶あるいは立憲僧侶と非宣誓僧侶の二陣営に分かれた。西部ではこの非宣誓派が多数を占めた。

(39) cf. G. Venzac : *Op. cit.* p. 106.

(40) L. Guimbaud : *La Mère de Victor Hugo*, p. 19—45. R. Escholier : *Victor Hugo, cet inconnu* (1951), p. 1—2. A. Mautrois : *Olympio ou la vie de Victor Hugo* (1954), p. 12.....etc.

- (41) cf. G. Venzac : Op. cit. pp. 107—108.
- (42) L. Guimband : Op. cit. p. 32 et p. 54.
- (43) カリエは一七九三年十月八日にナントに到着し、翌年二月八日に公安委員会からの手紙で議会に出席して報告すべしとの命をいけ、二月十六日にナントを去る。cf. P. Dubois : Op. cit. p. 20, G. Venzac : Op. cit. p. 100. n. 2.
- (44) 一七九四年四月に二百十人もの農民を虐殺した。G. Venzac : Op. cit. Note I. pp. 635—641.
- (45) V. H. R. I. p. 10.
- (46) 一七九九年にノオホニエ・ホローがマリ・シモン・マンソンに宛てた手紙。「もしわたしが妻の家族の皆さんと識りあふたなら、なんともあれじうじうでいぢや。」P. Dubois : Bio-bibliographie de Victor Hugo de 1802 à 1825. (1913) p. 188.
- (47) P. Dubois : Victor Hugo, ses idées religieuses de 1802 à 1825 (1913) p. 74 et pp. 76—83.
- (48) P. Foucher : Op. cit. P. 141.
- (49) P. Dubois : Bio-bibliographie de V. Hugo. p. 184.
- (50) Ibid. pp. 190—193. Louis Barthou : Le Général Hugo (1926) pp. 20—21.
- (51) 一七九三年二月二十四日に可決された「ママルガム法」で義勇兵二大隊と第一線部隊一大隊とを統合して半旅団を編成することが決められた。
- (52) A. Maurois : Op. cit. pp. 18—19.
- (53) Catherine Thomas Cécile は病院の出納係を公金横領のためにやめた男の娘で、ソフィーの死後、正妻になる。cf. L. Barthou : Op. cit. p. 42.
- (54) Victor Fanneau La Horie ソフィーとは一七九九年にマリと識り合った。L. Barthou : Op. cit. p. 81. またヴィクトル・ホローの名付親で、マヤ。
- (55) L. Guimband : Op. cit. pp. 189, 299, 88.

- (95) G. Venzac : Op. cit. pp. 119—120.
- (96) L. Barthou : Op. cit. p. 65. 下のルビロト「西々臣民」のルビロト。A. Maurois : Op. cit. p. 22.
- (97) G. Venzac : Op. cit. p. 120.
- (98) L. Guimbaud : Op. cit. pp. 217 sqq.
- (99) G. Venzac : Op. cit. p. 118.
- (100) V. H. R. I. p. 10.
- (101) 祖(々)々孫(孫)。
- (102) V. H. R. I. p. 10.
- (103) P. Dubois, R. H. L. F., 1908, p. 8, le 29 déc. 1773. P. Dubois : Victor Hugo, ses idées religieuses, p. 2.
- (104) P. Dubois : Op. cit. p. 3. G. Venzac : Op. cit. p. 136.
- (105) Macé de Challes ; *Figaro*, 15 août 1888, p. 3, col. dans G. Venzac : Op. cit. p. 132.
- (106) Mon Dieu ! j'ai combattu soixante ans pour ta gloire ; [Voltaire : *Zaïre*, Act II. 3. v. 649 (1732).]
- (107) P. Dubois : Op. cit. p. 4.
- (108) G. Venzac : Op. cit. p. 134. n. I. A. Bourdeaux : *Memoires de la Société d'histoire et d'archéologie de Bretagne*, (1933) p. 91.
- (109) G. Venzac : Op. cit. pp. 160—161.
- (110) cf. P. Dubois : Op. cit. p. 84.
- (111) V. H. R. I. p. 160.
- (112) P. Dubois : Op. cit. pp. 84—85. 娘や孫娘と同じ修道院のベルトロニ僧修道院長に一七九四年三月一日死刑を宣告し、一人の聖マルシオン修道尼が一七九四年五月十二日長期拘留を宣告する。
- (113) V. H. R. I. p. 14.

- (75) Bibliothèque nationale, Manuscrits, Nouvelles acquisitions françaises, 23.802, f°22. cf. G. Venzac : Op. cit. p. 149, n. 1.
 (76) G. Venzac : Op. cit. p. 114.
 (77) P. Dubois : Bio-bibliographie de V. Hugo, p. 210.

ルキスル

こので使用したルキスルは

L' édition Ollendorf-Albin Michel (dite { de l'Imprimerie Nationale }) en 45 volumes, publiée par Paul Meurice (1904—1905), et poursuivie par Gustave Simon (1905—1914), puis par Mme Cécile Daubray (1933—1952).

ルキスル

Mme Hugo (Adèle) : Victor Hugo raconté par un témoin de sa vie Edition Hetzel, dite { ne varietur }, 1865. 著者 V. H. R. の 48 号。

参考文献

- (1) Barthou (Louis) : Le Général Hugo [Paris, Hachette, 1926]
 (2) Benoit-Lévy (Edmond) : La Jeunesse de Victor Hugo [Paris, Albin Michel, 1928]
 (3) Berrét (Paul) : Victor Hugo [Paris, Garnier frères, 1927]
 (4) Biré (Edmond) : Victor Hugo avant 1830 [Paris, Perrin, 1892]
 (5) Dubois (Pierre) : Victor Hugo, ses idées religieuses de 1802 à 1825 [Paris, Librairie Ancienne Honore Champion, 1913]
 (6) Dubois (Pierre) : Bio-Bibliographie de Victor Hugo de 1802 à 1825 [Paris, Librairie Ancienne Honore Champion, 1913]
 (7) Dubois (Pierre) : La famille maternelle de Victor Hugo, dans la Revue d'histoire littéraire de France, 1908.
 (8) Dupuy (Ernest) : La Jeunesse des Romantiques, Victor Hugo—Alfred de Vigny. [Paris, Société française d'imprimerie et de librairie, 1905]
 (9) Escholer (Raymond) : Victor Hugo, cet inconnu [Paris, Plon, 1953]

ヴィクトル・ユゴーの宗教的感情の源泉 (杉山)

- (10) Guimbaud(Louis) : La Mère de Victor Hugo [Paris, Plon, 1930]
- (11) Guillemin(Henri) : Hugo et son poème«Dieu»dans *Europe*, numéro spécial de février-mars 1952
- (12) La Rochejaquelein : Mémoires de Madame la marquise de La Rochejaquelein.[Paris, Chez L. G. Michaud, 1815]
- (13) Maurois(André) : Olympio ou la vie de Victor Hugo[Paris, Hachette, 1954]
- (14) Maurois(André) : René ou la vie de Chateaubriand [Paris, Grasset, 1938]
- (15) Venzac(Géraud) : Les Origines religieuses de Victor Hugo [Paris, Bloud & Gay, 1955]